

前奏 黙想	讃美歌 450 わかき日のみちを
讃美歌 53 さかえあるいこいの日よ	入会式 信仰告白
祈禱	献金
聖書 コヘレトの言葉 3:18~22	讃詠 547 いまささぐるそなえものを
ローマの信徒への手紙 7:24~25	黙禱
讃美歌 II-161 輝く日を仰ぐとき	主の祈り 564
説教 『空しさの奥底には』	讃詠 546 聖なるかな
祈禱	祝禱 後奏

「人間に臨むことは動物にも臨み、これも死にあれも死ぬ。同じ霊をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しくすべてはひとつのところにいく。すべては塵から成った。すべては塵に戻る。人間の霊は上に昇り動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう(コヘレト 3:19~21)。

律法の行為でも、信仰の規範でも「それらに忠実ならば天に昇り、それを守らなければ動物のように地の下に降る」と宗教指導者らは人々に脅しをかける。それに対してコヘレトは、権威を恐れず「死後どうなるかを、誰が見せてくれよう(3:22)」と当然のように言う。こうした感覚は現代人に近い。

「すべて空しい(3:19)」ことは虚無ではない。「空しさ」は、「神が人間を試され、人間に自分も動物にすぎないということを見極めさせる(3:18)」ための積極的な動機なのだ。祭司や律法学者は、神との契約関係にある存在として「我が民」を特別視するが、実際には動物と違わないではないか、と。

ロマ書も幻想に陥ることなく、人間存在を冷徹に見定めている。つまり「わたし=人間」の奥底を無難に納得したりせず、偽りなき実感で迫って来る。人間は「自分のしていることが分らない(7:15)」、「自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている(7:19)」。人間が「望まないことをしているのは～もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのだ(7:20)」と手加減がない。そんなに思いつめないでも、と感ずるが、へたな慰めや励ましは、人間が己の真実と向かい合う機会を奪う。

ロマ書は、己が罪を隠すことなく語り続け、吐き出すような絶望に達する。「わたしはなんと惨めな人間なのか。(罪に縛られて)死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのか(7:24)」。嘆きが極まると突如調子が変わる。「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えているが、肉では罪の法則に仕えている(7:25)」。ここで言う「心と肉」とは、現代人が想定するような精神と肉体のことではない。統合されずに引き裂かれている人間の真実、とでも言えようか。それにしても、一瞬垣間見るこの唐突な光は何なのか。

聖句を私なりにイメージするとこんな感じ。暗雲が厚くなり闇が辺りを覆う。そして雲間から一瞬「主イエス・キリストを通して神に感謝します」という光が地にふり注ぐ。ところがすぐに「心では神の律法に仕えているが、肉では罪の法則に仕えている」暗雲の闇に戻る。するとどうだろう。「わたしはなんと惨めな人間なのか」という嘆きも光を放っているではないか。依然「肉では罪の法則に仕える」暗雲にあっても、一度注がれたキリストの光は、人間の内部から私自身と世を照らし続ける。

キリストによって都合よく世界が明るく麗しいものになり、信仰者の苦悩や葛藤が消え去るわけではない。恵みや救いを「信仰の報酬」のように考える教会もあるが、それは神に忠実なのではない。功利的で、祈りや儀礼で神を操縦する、隠された傲慢。それはイエスを主とする教会のものではない。

「キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放した(8:2)。「空しさ」は人間を見つめさせるが(コヘレト 3:19)、空しさの奥底にこれほどの恵みがあるとは、想像を超えている。天に昇るか地に降るかどころではない。キリストの霊によって命はまったき自由を得る。

空しさは道標なのか すり鉢状の道を廻り谷底へ降りていく 動物にまさるところなく(コヘレト 3:19) よくよく見ればお互いボチボチやね 谷にいても稜線にいても 己が命 キリストと共に瑞々しい 本日の入会式、諸手続きが完了し7月2日の役員会を経て、加藤美和さんが正式に八ヶ岳教会の現住陪餐会員になりました。次主日7/23の礼拝は長崎哲夫牧師に説教していただきます。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。